

先日、「TSUTAYA」で、ぶらぶら書籍を眺めていると、『三島由紀夫スポーツ論集』という岩波文庫（緑）が目についた。三島のスポーツ論？表紙には、一九三九年に開催された東京オリンピック開会式における日本選手団の入場シーンがプリントされていた。オリンピック競技の観戦や自らの身体活動を通じての評論が多数収められている。三島はそこで、神輿担ぎの経験についてこう言う（以下、若干読みやすくした三島の言説を引用）。「あの力の自在な感じは、懸声がなかったら、忽ち失われるにちがいない。そしてリズムある懸声と力の行使と、どちらが意識の近くにいるかと云えば、ふしぎなことに、それはむしろ後者のほうである。懸声をあげるわれわれは、力を行使しているわれわれより一そう無意識的であり、一そう盲目である。この無意識（懸声）と意識（肩の重み）の結合は必ず到来する。懸声はわれわれの力の自由を保証し、力の行使はたえずわれわれの陶酔を保証するのだ。肩の重みこそ、われわれの今味わっているものが陶酔だと、不断に教えてくれるから……」

このことをわれわれに引き寄せて読むとき、あらゆる場面で集団が力を発揮するときの地平についての言説として：私には読める。みんなが「深い孤独な作業」に向かう、すなわち一人机に向かい文献と格闘するときの「勢い、苦しさ、いら立ち、不安」は、神輿の重量のように入れわれの肩に。一方で、日常当たり前のようにある家族や学校、友や先生たちについて、改めてその存在を強く意識することはないでしょう。言わば、神輿の懸声のように、日常、意識から遠のいているが、孤独に机に向かう自分に「声ならざる懸声」をかける存在……。そして、孤独な自分もまた友に「声ならざる懸声」をかける存在である。この「意識と無意識の結合」はどのように訪れるのか？それは、おそらく意図的につくれるものではない。それぞれが「孤独な作業」に向かいつつ力を行使し、宇大という環境を最大限使い切る……。そこでは、友や先生たちもまた「孤独」に立ち向かっているはず。

そして先生たちは、個々への眼差しを尽くす。教育において、本当の仕事がここにあると思うから……。これから、それぞれの研究活動が佳境に入っていくことだろう。われわれが真の孤独に向かいつつ、声ならざる懸声に包まれるとき、気がつけば「陶酔」の世界に入っている。そこで、われわれは何を担ぐのか？どこに向かうのか？まだ、よく分からない。でも、気がつけば、しかるべきところに納まり「陶酔」は余韻たっぷりに終わりを迎えるでしょう。神輿が必ず、最後には神堂へ帰るように……。心配はいらない。安心してこの陶酔に浸ってみようと思う。

おそらくは、鬼才三島由紀夫の真意を大きく外れる解釈に違いない……。それでも……。この観念的世界での勝手な自己問答？が実に心地よいんです。科学的根拠はない……。拠り所は自らの栄養となり得るか？と、ごく少数でも共感する他者がいるか？ということ……。特に後者は誰もが気になるところだろう。心地よい観念的自己問答の先に、他者との繋がりを求めている自分がいます。ひとり観念に遊ぶ孤独な自分と、そこでの思索を言葉に落とし、恐る恐る周囲に問う。そんな自己満足の世界？ですので、我慢して読んでくださる皆さんからの御意見は大変ありがたいし、議論のきっかけになれば幸いです。研究論文も同じ気がします。

われわれが、取り組んでいる研究（行政学、政策学）は、自然科学が武器とする実験装置があるわけではないので、「客観性」「再現可能性」等々については心もとない学問と思われがちです。修士時代の恩師、佐藤臣彦先生は、「客観性は、多くの主観を根拠に保証される。つまり、多くの主観が納得する論理展開（方法）から導かれる人文・社会科学もまた科学なのであり、文理が分離した現状は知の体系を品祖にする。だからね、先入観から自分の枠を決めては損をする。何を知りたいのかを問い、そのために必要な方法は何かを考えること……。そのとき文理の壁が邪魔になる。」と諭してくれたことが印象的で忘れられない。われわれが所属する宇大「先端融合科学専攻」に込められた真意もそこにあるのではないだろうか。